

横浜町ミニデータ

- 人口 4,346人
(男2,176人、女2,170人)
- 世帯数 2,117世帯
(令和3年8月1日現在)
- 特産品
ホタテ、ナマコ、長芋や馬鈴薯。

【概況】下北半島の首位部に位置し、東には下北丘陵、西は陸奥湾に面し、春には一面に菜の花が咲く自然豊かな町。陸奥湾からの風を活用した再生可能エネルギー施設の導入に取り組み、22基の大型風力が稼働している。



青森県の 市町村 情報

横浜町発★キラリ

各市町村で活躍するグループ・団体・企業等を紹介します。
今回は産直グループ『なたねの会』をご紹介します。
代表の澤谷久美子さんにお話を伺いました。



▲「なたねの会」代表の澤谷久美子さん。

**道の駅とタッグを組んで
町の一次産業を活性化**

「なたねの会」は、平成11年の道の駅よこはま「菜の花ブラザ」のオープンと同時に設立されました。農業・水産業・加工品の生産者たちによる多種多様な商品で、道の駅の産直コーナーを盛り上げています。

同会設立の2年後に入会し、4年前から代表を務める澤谷久美子さんは、「自分たちが作ったものを直接販売できるのが産直の魅力。産直販売を続けるために、この会をメンバーみんなで守ってきました」と話します。年月が経ち当然高齢化が進みましたが、そういった課題にも知恵を出し合い、前に進みました。野菜を作っても出荷するのが不自由になってしまったメンバーのために、集荷の手伝いを行い、また、地域全体の高齢化にも対応させるため、移動販売等の新たなサービスも開始しました。さらに、地域の子どもたちが参加できる事業や、地元住民のためのイベントを企画。このような女性の視点を活かした多彩な取組が評価されて、昨年度は「青森県いきいき男女共

同参画社会づくり表彰」で「女性のチャレンジ賞」を受賞しました。同会の活動は、生産・販売等の経済活動を底支えるもので、地域の活性化にも繋がります。

**小売にやりがいを感じる日々
その魅力をもっと伝えたい**

代表の澤谷さんは、昭和21年から続く「澤谷養蜂園」を家族で営んでいます。「なたねの会」に入り産直を始めたことで、家業は大きく方向転換。それまでは生産のみで、販売先は卸問屋のみでした。「まとまった量を買って取ってもらえて経営的に安定する反面、立場が弱く中間マージンも発生していました。そして何より、お客様の顔が見えませんでした」と澤谷さんは話します。「世の中に産直の仕組みができたときに、私もお客様に直接販売したいと思うようになりました。横浜町に道の駅ができると聞いたとき、家族に、私たちも産直をやらないかと提案したんです」。快くOKを出してくれたことで、なたねの会のメンバーの一員に。澤谷さんは、小売部門を担当することになりました。

工夫を凝らして売上を伸ばし、今では問屋への卸しをやめて、小売一本になったと言います。「お客様と対面で話すので、いろいろな声をもらってやりがいにつながります」と、澤谷さんは笑顔です。「なたねの会を通じた産直の活動はとも魅力があると思います。町内の生産者の方々にもっとその魅力を伝えて、メンバーを増やしていきたい。そして道の駅や地域を発展させていくことが、今の目標です」。

私が男女共同参画を担当しています

横浜町企画財政課
主査
長谷川 博紀 さん



横浜町では、平成24年度から令和3年度までの期間で「横浜町男女共同参画基本計画」を基に男女共同参画の推進に努めています。男女共同参画に関する取組の一環として、若年期の自立支援を行う相談窓口・専門機関の紹介を行っています。その他の取組としては、数年前に上十三地域男女共同参画ネットワークと共催し、男性向けの料理教室を開催したことがありました。その際、町内において男女共同参画の視点がなかなか根付いていない現状が課題として浮かび上がってきたため、その経験を踏まえて、男女共同参画に関する取組を知らせるパネル展示を行い、理解促進に取り組んでいきたいと計画しています。

役場内では、女性の登用を積極的にに行い、役場の管理職や各種審議会での女性の割合を増やすように取組を進めています。あらゆる政策や方針決定の場において女性の意見を取り入れることで、職場や地域社会でのジェンダー平等を推進し、性別による社会的差別をなくすよう努めています。

「なたねの会」は、女性の方々が積極的に活動し、発信源となっている道の駅で活躍されています。町の名物や特産も次々と生まれ、特に観光面においてとても助かっています。これからそれぞれ力を存分に発揮していただけるよう、町としても支えていければと思っています。

(取材：井藤 雪香)